



『魔法先生ネギま！もうひとつの世界』
第四話『父の道か、師の道か!?!』

原作 赤松健

【登場キャラクター】

ネギ・スプリングフィールド
長谷川千雨
ジャック・ラカン
エヴァンジェリン(のコピー)

神楽坂明日菜
桜咲刹那
近衛木乃香
長瀬楓
宮崎のどか
古菲

さよ人形(さよの魂が入った人形)
四葉五月(回想で登場)

クレイグ・コールドウエル
クリスティン・ダンチエツカー
アイシャ・コリエル
リン・ガランド
村人たち
村人(宿の女将)
旅人A・B
黒竜



□アバンタイトル

□ラカンの住処・遺跡の上(朝)

ネギが拳法の型を練習している。大きく踏み込んで拳を繰り出す。

そこに千雨がやってきて、

千雨「朝っぱらからけんぼーの練習かよ?先生」

ネギ「(振り向き)…千雨さん」

千雨「ホレ」

千雨がネギに巻物を上げて「よ」す。

ネギは受け取って、

ネギ「これは…」

千雨「エヴァンジェリンがその昔記した、マキア・エレベアの巻物って話だ」

ネギ「これは…ただの呪文のスクロールじゃないですな」

千雨「もし光の道を行くなら開けるな。闇を選ぶなら開けてみる…だとさ」

ネギ「……………」

千雨「……………つてまあ」

千雨、ため息をついて、

千雨「どっせもうあなたの心は決まってるだろう?…たく無茶な結論だぜ」

ネギ「……………」

千雨「これでもあなたの」トトは結構見てるつもりだからな。それくらいわかる」

ネギ「……………」

□OP

□サブタイトル

□ラカンの住処・棧橋

ラカンに向かい合うネギ。

ラカン「よおぼーす。どおだ?決めたか?」

ネギ「ハイ」

ラカン「で?光と闇どっちだ?」

ネギ「ハイ…」

ネギ、巻物をラカンに差し出す。

ラカン「む」

とラカンは少し驚くが、

ラカンM「なるほど。やはり親父の道に行くか。ま、それもありだろうな」

ラカンが手を伸ばして巻物を受け取ろうとしたところ、

ネギ「千雨さん。すみません、やっぱり…この選択って無茶かもしれませんがね」

後ろで見ていた千雨は、突然呼ばれて驚くが、励ますような笑顔で、

千雨「…ふん。何だよ先生。まだ悩んでんのかよ。正しいか間違ってるかなんてやってみるまでわかんねーだろ。デカイ決断だしわかんなくもないが…けどな…それは…」

真剣な顔つきになって、

千雨「あんた自身が選ぶ道だ。あんたがあんた自身で踏み出す一歩だ！」

ネギ「……！」

ネギは千雨の言葉に聞き入っている。

千雨「無茶だとか関係ねえ。胸張っていいんだぜ？私が……ちゃんと見届けてやるからさ」

ネギ「……ありがとうございます」

ネギ、決意が固まり穏やかな笑顔になって、

ネギM「そつだ。僕の心は決まっている。考えた末の結論……」

ネギ、巻物の紐に手をかけて、

ネギM「間違ってるかもしれない。闇に飲み込まれるかもしれない。でも…それでも」

紐を一気にほどく。

ネギM「これからもみんなと一緒に歩いていくために！父さんを目指すために！

僕はあえて……！」

巻物を広げて、宣言するネギ。

ネギ「ラカンさん！僕は…闇を選びます……！」

ラカン「ほ……」

一瞬驚くが、ニヤリと笑うラカン。

ラカン「ほっほー。こりゃ意外だぜ。けど、ぼーず、親父を指摘するのはいいのか？」

ネギ「僕は父さんじゃありません。格好だけ真似しても父さんにはなれない。僕に闇の素養があ

るのなら…それを突き詰めることでしか、父さんには辿り着けないと思うんです」

ネギ、ニ「ツツと笑って、

ネギ「それに僕…マスターの事も大好きですから」

千雨は「へ〜」という表情。

ラカンは「プツ」と吹きだして、

ラカン「ワハハハハハ！そりゃいいいぜ愛の告白だなぼーず」

ネギ「え！？いえ、そーゆー意味じゃ……？」

ラカン「フフ…しかし闇を甘く見たなぼーず。

そのスクロール、一度開けちまった以上……キツイぜ？」

ネギ「……それもわかってます。このスクロールが普通じゃない」ト……。覚悟の上です。

乗り切って見せますよ」

エヴァの声「言ッタナ。餓鬼カ」

ネギ「え」

巻物がパアツと光りだして、

千雨「何？」

巻物から、エヴァンジェリンが現れる。

エヴァ「闇ガソレホドタヤスイものデハナイことヲ思イ知ルガイイ」



ネギ「マスターー!？」

エヴァがネギの頭をガキッと掴む。

ネギ「ぐっ!？」

ネギの頭の掴まれた部分に魔力が走り、

ネギ「ガッ…あああああぁっ!？」

エヴァ「打チ勝ッテミセロ。耐エラレナケレハ貴様ハおわりダ」

千雨が驚き慌てて、

千雨「ど、どっいうことだよ!? 何でアイツがっ」

ラカン「言ったらろ? キツイって」

ネギの頭に一際強く魔力が走る。

ネギ「うわああああ!！」

□とある遺跡

そのころのどか。

のどか達「ハアッハアッ」

のどかとクレイグたち冒険者の一団が、崩れていく遺跡の内部を、出口に向かって走っていき。

リン「ダメだ! 崩れるっ」

アイシャ「走って走ってえ! 生き埋めよ!」

クリス「まさか最後にこんなヘタなトラップたあね」

クレイグ「嬢ちゃん大丈夫か!？」

のどか「ハイッ」

走る先に、光が見えてくる。

クレイグ「見ろっ! 出口だ」

アイシャ「やったあっ」

× × ×

遺跡から離れた丘。

崩壊していく遺跡を眺めているクレイグたち。

クリス「たー。危なかったー」

アイシャ「まさか遺跡が丸ごと崩れるとはねえ」

のどか「ふー。死ぬかとー…」

アイシャがのどかに振り向いて、

アイシャ「ケガはないノドカ?」

のどか「ハ、ハイ」

アイシャ「でもホントたくましくなったわよねえ。遺跡で拾ったアンタが仲間に入れてくれて

言った時はどうしようかと思っただけど」

クレイグたちも振り向いて、

クリス「うんうん、ノドカちゃんの異常見能力は一級品!」



リン「使える…」

クレイグ「その歳でそんなスキル、どこで身につけたんだい？」

のどか、照れながら、

のどか「えーと…部活でー」

アイシャ「へえ？」

× × ×

冒険で得た宝物を広げて、分配の相談をしているクレイグたち。

クレイグ「よしお待ちかねのお宝分配タイムだぜ」

クリス「苦労しただけあって大漁だねえ」

少し離れてのどかが見ている。

クレイグ「嬢ちゃん、ホントにお宝はいらんのかい？」

クリス「遠慮するコトないよ〜？」

のどか「いえ、そんなー。私はコレだけで充分です。多分、売ったらスゴイお値段だしー…」

のどかが持つている指輪状の魔法具を、アイシャが横から覗き込む。

アイシャ「ふーん。これがノドカが捜してたマジックアイテムね」

のどか「ハイ、ついに。皆さんのおかげですー」

のどか、魔法具を見ながら、

のどかM「相手の名前を見破る魔法具『鬼神の童謡』。ちょっと悪モノっぽいかも…」

うれしそうに微笑む。

□とある森

そのころの木乃香と楓。

木々をなぎ倒しながら、黒い竜が楓を追いかける。

楓は、巨大手裏剣を背負って、目隠しをしながら走る。

楓M「(後ろの竜を振り向き)20メートル以上の図体でこの機動力…」

それに加えて莫大なスタミナ。なるほど、竜種とは凄まじいモノでござるな…！しかし！

楓、空中高くジャンプ。

竜も楓を追って、翼を広げて飛ぶ。

楓、空中で本体含めて5人分身する。

黒竜「(グル…?)」

楓「楓忍法！縛鎖爆炎陣！」

5人それぞれが、鎖(お札が何枚もつなげてある)のついた巨大手裏剣を竜に投げる。

鎖が竜に絡みついていく。

楓、印を結んで、

楓「ナウマク・サマンダ・ヴァジュラダン・カーン」

それに反応して、お札が爆発し、竜を爆煙が包む。

× × ×

木乃香「ひゃあっ」

そこから離れた場所にいた木乃香、急に爆音が聞こえて驚く。

木乃香「今のは？楓ーっ！」

音のした方を心配そうに見て、

木乃香「まさか楓、黒ドラゴンにやられてもうたなんて」トトは…」

そこにズウウンという音(竜が地面に落ちた音)がして、

木乃香「びゃ」

楓の声「心配ご無用」

木乃香が振り向くと、気絶した竜と、目隠しをした楓がいた。

楓、目隠しを外して、

楓 「黒竜退治、完了でございますよ」

木乃香「楓え！」

楓 「少しやりすぎてしまったようでございます」

木乃香「わかった。ウチが治したるな！」

楓 「かたじけない。ああ、片方の角は治さぬようにな」

木乃香、パクティオカードを取り出し、

木乃香「アデアットー！」

アーティファクトが現れて、それに伴って狩衣姿になる木乃香。

木乃香「東風ノ槍扇(コチノヒオウギ)、南風の末廣(ハエノスエヒロ)」

扇(アーティファクト)をかざして舞うと、黒竜の傷が治っていく。

楓M「おお…あれほどの巨体を治癒していく…。凄いですね」

感心する楓。

目を覚ました黒竜がうなりだす。

黒竜 「(グルッ、グルオッ)」

楓 「む、イカン。回復してまたひと暴れか？このか殿、下がっ……」

楓が駆け寄ろうとすると、木乃香が黒竜の鼻に手を置いて諭すように話す。

木乃香「もう悪さしたらアカンえ。メッ」

おとなしくなる黒竜。

それを見て楓も笑顔に。

x x x

黒竜が飛び去っていく。

木乃香、それを見送りながら、

木乃香「ほなな」

楓 「…いずれにせよ依頼どおり、きょうの片方の角を折ったでございますから、角の生え変わる来年

まで戻ってくることはないでございます」

木乃香「アヘアット」

元の姿に戻る木乃香に、

楓 「いやあしかし、このか殿はスゴイでございますね」

木乃香「えー何ソレ？ほめても何も出えんよ。それ言ったら楓がて、目隠ししたままドラゴンに



勝つてくたせー」

楓 「いや何。これは修業の一環で……」

楓、拳をぐっぐ握りしめて、

楓 「いや……この程度ではまだまだ足りぬよ……」

木乃香「へえ……うって楓も怪我してるやんか。ウチが治したるな」

楓 「ハハハハ。このか殿の治療術の腕がメキメキ上がってますよ」

□森の近くの村

村人 「開門、開門ー！」

村人 「帰ってきやがったぜえー！」

という村人たちの声に続いて、木乃香と、ドラゴンの角を背負った楓が村に入ってくる。

村人たちがどよめいて、2人の周りに集まる。

村人 「おい、ありゃ黒竜の角じゃないか!？」

大勢に囲まれての喝采に、戸惑い照れる楓と木乃香。

村人 「いやーよくやってくれたお二人さん。」

村人 「糸目の姉ちゃん、あんた噂じゃホンモノのニンジャなんだってなあ」

村人(宿の女将)が、旅人二人を示して、

村人(宿の女将)「それに比べてウチに泊まってる」ロツキの役に立たない」

旅人A「うっ……カンペンしてくれよ女将さん」

旅人B「黒竜だぜ?」

楓、困ったように謙遜して、

楓 「いやあしかし村を襲っていた2匹の竜のウチ、1匹しか退治できなかったでござるから……」

村人(宿の女将)「それなら安心おし。なんともう1匹も旅の二人組の賞金稼ぎが退治してくれ

たらしいんだよ!もう安全さね」

楓 「ほお」

村人(宿の女将)、立ち去りながら、

村人(宿の女将)「あとでウチ来なよー辺境一の料理をご馳走してやるからさ」

楓、女将に手を振りながら、木乃香「、

楓 「しかし……不思議なものでござる。元の世界では役に立たなかった拙者の力で、こつも人に

喜んでもらえるとは……なあ、このか殿」

木乃香「……」

楓 「……このか殿?」

木乃香の顔は暗く沈んでいる。

楓、フツと微笑んで、

楓 「フフ……このか殿がそれほど落ち込んでいるのは珍しいとびんごな」

木乃香、ハッと我に返って、

木乃香「ごまかすように慌ててえっ、ううんっ、別にウチそんな……」

楓 「大丈夫。ネギ坊主も無事だった。きつと判那殿もアスナ殿も……。元氣を出すでござるよ」



ちにしたりしているウチにな…」

明日菜、グッと拳を握り、

明日菜「よしこれで後は…！ネギやみんなと合流するだけよっ…！」

木乃香「おー！」

□ラカンの住処・棧橋

敷かれた布団に横たわって、ネギが苦しそうにあえいでいる。

その横で看病している千雨、焦った様子でラカンに向かって、

千雨「くそっ、熱が下がらねえ。こないだと同じだ！オイッ、あの女、何しやがった!？」

つか、どっか行った!？」

ラカン「あの女？エヴァもどきの「トト」か？ありゃあエヴァの劣化」E…人造霊だな。

今頃ほーずの中だろうぜ。闇を使いこなせるようになるための試練だな」

ラカン、ニヤリと笑って、

ラカン「ほーずがこの試練を乗り越えられなければ、二度と目を覚まさねえか、少なくとも魔法を

使えねえ体になっちまっだろうな」

千雨「なっ…そんな話聞いてねえぞ！知ってたんなら止めっ…」

ラカン「マトモじゃない方法なんだ。これくらいは覚悟の上だろうっ」

千雨「………!？」

苦しそうなネギに目を戻して、

千雨「くそっ」

また看病を始める。

□幻想空間

何もない真っ白な空間に倒れているネギ。

ネギ「うっ…」

目を覚まして起き上がる。

ネギ「「うっは…っ」

エヴァの声「構工ロ」

ネギ、後ろからの声に振り向く。

白いマントを着て、右手に「断罪の剣」(※12巻巻末に魔法の解説)を出現させたエヴァがいる。

エヴァ「構工ネバ…死ヌン」

ネギ「マスター…」

エヴァ「精神ノ死ダガナ」

エヴァが断罪の剣で襲い掛かってくる。

ネギ「!？」

ネギも同じく断罪の剣を右手から出して、エヴァの攻撃を受け止める。

エヴァ「ホオ?『断罪の剣』カ。私ノ真似トイウ訳ダ」



エヴァ、つば迫り合いでネギを押しながら、

エヴァ「ナルホドナルホド。最初カヲソノ気ダツタトイウコトジャナイカ。ククク」

エヴァ、断罪の剣をなぎ払って、ネギを突き飛ばす。

エヴァ「馬鹿メ」

ネギ「ぐあっ」

ネギ、地面を転がっていくが身を起さず。

エヴァ「ハハハハ。自ら闇ヲ選ブ愚カ者ガイルトハナ」

エヴァは黒いマントにキャミソールという格好に変わって、浮遊しながら両手に断罪の剣を構えている。

周囲の風景が、かつてネギとエヴァが戦った橋(単行本3巻24&25話)に変わっている。

ネギM「場所が……いや落ち着け。ここは多分、僕の頭の中。」

あのマスターもホンモノじゃないはず」

エヴァ「闇トハ何ダ? ポーヤ」

せせら笑いながら問いかけるエヴァ。

エヴァ「光ニ対スル影。昼ニ対スル夜。正ト邪。善ト悪。秩序ト混沌。条理ト不条理……。」

ダガ、ココデ貴様ニ必要ナノハ、モットしんぶるナカサ」

詠唱を始める。

エヴァ「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック。

来レ氷精(ウエアント・スピリトゥス・グラキアールス)、

大気ニ満チヨ(エクステンダントウル・アーエーリ)、

白夜ノ国ノ(トウンドラム・エト)、

凍土ト氷河ヲ(グラキエム・ロキー・ノクティス・アルハエ)」

エヴァの魔法で、ネギのいる地面から不意に巨大な氷柱が現れて襲い掛かる。

エヴァ「コオル大地(クリュスタリザティオー・テルストリス)!!」(※3巻巻末に魔法の解説)」

ジャンプしてそれを避けるネギ。

エヴァ「其ハ全テヲ飲ミ込ム暗キ穴ニシテ始マリノ闇…始原ノ混沌ダ」

また詠唱を始める。

エヴァ「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック。来レ氷精、爆ゼヨ風精!」

ネギ「!」

エヴァ「氷爆(ニウィス・カースス)!」(※3巻巻末に魔法の解説)」

大量の氷が発生し、その凍気と爆風に巻き込まれるネギ。

エヴァ「コノ意味ガワカラナケレバ…貴様ハココデ私ニ敗レ…死ヌ」

爆煙が晴れて、凍りつきながらも、エヴァに向かって身構えるネギが姿を現す。

ネギ「全てを飲み込む始まりの闇…」

エヴァを見据えながら、考える。

ネギM「落ち着け。この師匠も僕の記憶とイメージから作られた幻想に過ぎない。言わば僕の

『影』…僕のイメージなら…」

x x x



ネギの後ろに、ワルモノぼく笑う恐ろしいエウアのイメージ。

ネギM「僕のマスターのイメージ…マスターのイメージ…イメージ…勝てる訳ない」

× × ×

空中のエウア、ニヤツと笑って、

エウア「もつとも貴様はその意味を、既に知っているハズだがな」

ネギ「え」

エウアの言葉の意味を一瞬測りかねるネギだが、その一瞬でエウアがネギの目の前に接近する。

ネギ「ぐっ…」

エウアが拳で強烈な一撃。

□とめる岩山

そのころの古菲。

一際高い岩山の上で、拳を構えながら深呼吸をしている古菲。

足元の岩に拳を当て、一瞬動きを止める。

古菲「っ！」

そして拳に気を込めると、ズムツと岩が陥没し、ビシビシと亀裂が走っていく。

古菲「爆裂寸動！ー！」
ハカリエツッジン

足元の岩が爆発したように砕けていく。

古菲「とっ…しまった！足場のごと忘れてたアル」

砕ける岩の塊に次々と飛び移りながら、下まで移動していく古菲。

古菲「瞬動、瞬動、瞬動」

下に着地すると同時に、岩山は完全に崩れ落ちる。

古菲「危機イバツ…アイヤッやり過ぎたアルかネ」

反省するが、

古菲「だが今日もまた一歩前進したアル。これだから修業はやめられないアルネ」

拳を握って満足そう。

そこで、目の前に何か(朝倉のアーティファクト)が漂っていることに気付く。

古菲「ん？な、何アルかお主？」

身構えたところで、アーティファクトに乗ったさよが飛んでくる。

さよ人形「あ、あゝゝ！いたあゝゝ！くへさゝんっ、捜しましたあゝゝ！っわゝん」

古菲「(振り向き)おおおっ！？地味幽霊！」

その言葉に、ガーンと凍りつくさよ。

さよ人形「あゝゝん、ヒドイですよ！くへさんのバカバカバカバカあ！一生懸命捜したのに！」

ポカポカと叩いてくるさよを抱きとめるように受け止めてる古菲。くるくる回りながら、

古菲「アハハハ。冗談アル、冗談アル。元気だたアルかさよ坊。あ、死んでた力。この広い世界で

よく私のコト見つけたアルね。しかも一人で！どうやったアルか」

さよ人形「エへへへ。色々ありますですなえゝ」



□幻想空間

周りの風景が、超包子の屋台付近に変わっている。

ネギとエヴァの戦いが続いているが、ネギはポロポロの姿で、呼吸も荒い。

ネギM「ダメだ……ッ」

エヴァ「ハハハ、どうしたほーや。もう終わりか!? たかだか数百時間で!」

空中のエヴァは、ネギに向けた何本もの氷の柱を、自分の周りに待機させている。

ネギM「勝てない!」

エヴァが氷の柱を一齐に放つ。

それを次々と避けていくネギ。

周囲では、屋台や建物が吹き飛ばされていく。

ネギM「いや違う。このマスターは僕の影!」ここで勝つというとは僕自身の影に勝つという……!」

エヴァがいつの間にかネギの背後に回り込んでいる(エヴァのマントはなくなっている)。

ネギ、気付いて振り向く。

ネギM「でも……どうやって勝つ!」?

エヴァの攻撃を避けるが、

エヴァ「……(ニヤリ)」

ネギ「!」

エヴァがスツと後ろに下がると、ネギとエヴァの間に吹き飛ばされた屋台が落ちてくる。

ネギ「!」

目の前に落ちてきた屋台に青ざめて、一瞬息を飲むネギ。

エヴァは屋台の向こうで蹴りの構えをとる。

ネギ「しまっ……」

エヴァがネギを手前の屋台ごと蹴り飛ばす。

宙を吹き飛んでいく屋台とネギ。

ネギ「ぐ……」

屋台に押されて飛ばされていくネギの周囲に、魔法の射手が9つ現れる。

ネギM「魔法の射手(サギタ・マギカ)」、

雷の九矢(セリエス・フルグラリス)!」

エヴァが、屋台に向かって跳ぶ。

ネギ「雷華崩拳!」
らいかほうけん

ネギ、屋台を破壊するが、エヴァがもう目の前に迫ってきている。

ネギ「!」

ネギとエヴァ、空中で拳の応酬。

エヴァ、ネギの隙をついて腕を絡めとり、

ネギ「ぎ!」

ネギの腕を折って、そのまま下へと叩きつける。



ドカアツと、ネギは建物の屋根に激突。

ネギ「う……ぐぐ……」

仰向けに倒れて動けないネギの顔を、エヴァが踏みつける。

エヴァ「くくくく……まだこれほど動けたとは驚いたぞ。この眠ることも逃げ出すことも死ぬことも許されぬ幻想空間でここまで持ち堪えるとは、奇跡に近い見事な意志力よ」

ネギの顔をむにむにと踏みながら、

エヴァ「だが貴様の精神にも限界は訪れる。これで何回目だ？70回ほどか」

右手に魔力を集める。

エヴァ「次は再び立ち上げられるかな。ぼーや？」

ネギ「……」

右手の魔力で腹に一撃。

□ラカンの住処・棧橋(夜)

上半身に包帯を巻かれて、ベッドに横たわるネギの体から、

ネギ「かぶっ！」

うめき声と同時に血が吹き出る。

千雨「ああっ、くそ、またかっ！オイおっさん薬草足りねえぞ。もっとうせせ！」

ラカン「うっい」

ラカン、アルテミシアの葉を取り出し、

ラカン「しっかし嬢ちゃん、あんたも大したもんだなあ。2日2晩寝ずにぼーすの看病たあな」

千雨「仕方ないだろ。これでこいつがどうかになったら、半分は私のせいだからな」

ラカンから葉を取り上げて、

千雨「つか、これはいつまで続くんだよ！いい加減マズイだろ！」

ラカン「確かに……。肉体的にはともかく、精神的にはマジで限界かもな」

千雨「何？」

ラカン「今、ぼーすがいるであろう幻想空間の体感時間は現実の数倍。10日以上は戦い続けている計算だ。フツーはまあ自我がもたねえな。このぼーすも大したもんだが……」

千雨「な……10日……っじゃあ」

ネギは苦しそうに荒く息をしている。

ラカン「ああ……このまま幻想空間を打破する糸口をぼーすが見つけられなければ……アウトだな」

千雨「……」

ラカン「言ったように二度と目覚めねえか魔法を使えなくなっちまっか……。今日の夜明けがリミットだろう……。嬢ちゃんも覚悟決めといた方がいいぜ？」

千雨「……」

千雨、巻物とナイフに目をやる。

千雨「(っ)……んやき……先生……」

□幻想空間



先ほどの続き。

血まみれのネギが、死んでしまったかのように意識を失って倒れている。

エヴァ「見下ろして…何だ終わりか。フン…」

エヴァ、ネギに背を向けて立ち去ろうとする。

エヴァ「これで光への道も闇への道も絶たれた訳だ。だがまあ…それもいだろう」

倒れているネギからトクントクンと心音が聞こえ出す。

エヴァはそれに気付かず、

エヴァ「仲間に助けてもらって家まで帰り、父親のことなど忘れて、あの学園で皆と楽しく過ごして

ていくのも悪くはない。お前はよくやったよ、ぼーや」

言い終わったところで、エヴァの背後ではネギが立ち上がっていた。無表情で暗く怖い顔つき。

エヴァが気配に気付き、

エヴァ「何？」

振り向くと、ネギの姿がフツと消えて、

ガツ…とエヴァの背後から、ネギの肘が決まる。

エヴァ「な…」

ネギ、吹き飛ばすエヴァを追い、ノドを掴んでドン…と地面に叩きつける。

そのまま地面を引きずりながらエヴァを押しやっけていく。

エヴァ「フ…氷爆(ニワイス・カースス)」

魔法で氷の爆発が起り、ネギはエヴァから離れる。

ネギ「…！」

エヴァ「ハッ」

2人、また接近して、空中で拳の打ち合いを始める。

エヴァ「ハハハいいぞ！やっとう角か!？」

無表情に攻撃を繰り返すネギ。

エヴァはそれを楽しそうに受け止める。

エヴァ「よく見ろ！よく味わえ！よく覚えておけ！」

2人、一度距離をとるが、

エヴァ「それこそが貴様の力の源泉だ！」

また接近して拳と拳をぶつけあう。

エヴァ「貴様の初期衝動！貴様の第一動因！貴様の原風景！…」

また応酬が続くが、

エヴァ「だが……」

エヴァの振り下ろした一撃が、ネギの胸を切り裂く。

ネギ「…！」

エヴァ「それだけでは勝てぬ。残念だったな……ぼーや」

血を噴き出しながら、落下していくネギ。

ネギM「やら…れた？それでも…ダメなのか」

ネギの表情が次第に元に戻っていく。でも諦めたような放心したような表情。



ネギM「当然か…。僕がマスターに…勝てる訳が…」

そこに明日菜の声が聞こえてくる。

明日菜オフ「この…バカネギ！」

ネギ「！」

× × ×

明日菜のイメージ。

明日菜「何よ、あんなエラそうなコト言っておいて。そんな所であきらめちゃう訳！？」

× × ×

エヴァがネギに追い討ちをかけようと、詠唱している。

エヴァ「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

来たれ氷精(ウェアント・スピリトウス)、

闇の精(グラキアーレス・オブスクーランテース)！

闇を従え(クム・オブスクラティオーニ)、

吹雪け(フレット・テンペスターズ)、

常夜の氷雪(ニワァーリス)！(※3巻巻末に魔法の解説)「

それをぼんやりと聞きながらネギは、

ネギM「でもアスナさん僕…もっ…」

× × ×

その時、この戦いが始まったころのエヴァの言葉がよぎる。

エヴァ「もっとも貴様はその意味を、既に知っているハズだがな」

× × ×

ネギM「!(気付く)…そうか…そうだ、僕は知っている…!!」

気付き、ネギの顔に生気が戻る。

エヴァ「終わりだよー！」

闇の吹雪!(ニワァーリス・テンペスターズ・オブスクランス)!(※3巻巻末に魔法の詳細)「

吹雪と暗黒が竜巻上になってネギに向かっていく。

ネギM「それは皆が僕に教えてくれた言葉の中に…」

迫る魔法の前にネギは回想する。

× × ×

千雨の言葉(14巻27ページ)。

千雨「デカイ悩みなら吹っ切るな。胸に抱えて進め」

五月の言葉(9巻40ページ)

五月「誰かを恨んだり何かから逃げたりして手に入れた力でも…

それは立派なあなたの力です」

エヴァの言葉(15巻143ページ)。

エヴァ「泥にまみれても、なお前へと進む者であれ」

× × ×

回想明けて。



ネギがカツと目を見開く。

目の前に迫ったエヴァの魔法を受け止める。

エヴァ「何!?!」

ネギM『闇の魔法』、それはつまり」

ネギ、魔法を受け止めながら、目の前でくすぐっている魔力のカタマリに手を伸ばす。

ネギ「ぐううう」

魔力から放たれる衝撃に押し返されそうになり、

ネギ「ぬうああっ…」

苦しげにうめくが、

ネギM「善も悪も強さも弱さも、全てをありのままに受け入れ飲み込む力!」

一気に魔力のカタマリを掴む。

ネギ「掌握!」

エヴァは感心したような表情で、

エヴァ「これは…」

ネギの体が黒っぽく変色し、メガネと上着が体から弾け飛ぶ。

魔力のカタマリを掴んだ左手に魔力をみなぎらせて立ち尽くしているネギ。

エヴァ「くくく…いいぞ、ぼーや」

エヴァはうれしそう。

エヴァ「マギア・エレベア…会得したか」

ネギ「あなたは僕の記憶から構成された僕の影。言わば僕の一部。あなたを倒すことがこの試練

に打ち勝つことではなかったんですね」

エヴァ「フフ…時間がかかりすぎだよ。だがいいだろう。ではその成果…」

エヴァ、右手から断罪の剣を出す。

ネギ「!?!」

エヴァ「見せてもらおう」

エヴァがネギに襲い掛かる。

ネギは右拳でそれに応戦。

拳を繰り出す瞬間、ネギの拳にまわりつくように、2つ重なった魔方陣が浮かび上がってか

ら、

ガツ!と、ネギとエヴァが激突する。

その衝撃で、周囲に爆発が起こる。

□ラカンの住処・棧橋(明け方)

ベッドに横たわるネギの傍らで、イスに座った千雨が貧乏揺すりをしている。

千雨「~~~~~くそっ。くそっ。」

うなされるようにハアハアと苦しそうに眠ったままのネギを見て、

千雨「まだかよ先生ッ。もう…待てねえぞ」

チユンチユンと鳥のさえずりが聞こえ始めている。



ラカン「んん？んん？んん？」

千雨「あん？おっさん、なんだそのリアクションは？」

今度はラカンを枕で叩き始める。

千雨「生きるか死ぬかの修羅場に2日もつき合わされたんだぞ！誰だろうと無事だったら涙く
らい出んだろーが！おかしいかよー！？」

ラカン「(楽しそうに逃げながら)ハハハハ」

ネギ「(訳が分からず)？」

ラカン、ネギに振り向いて、

ラカン「そうそう、ぼーず。嬢ちゃんに感謝しろよ。2日2晩付きつきりで瀕死のお前を看病して
くれたんだからな」

ネギ「え…千雨さんが……」

驚いた後、礼を言おうとするが、

ネギ「ち、千雨さんありが…わーっ!？」

また枕で何度も叩かれる。

千雨「うるさあーいッ！礼言ったくらいでこの莫大な借りを返せると思っなよ！土下座しろ下僕
になれえーいッ」

ラカン「わっはっはー!」

× × ×

千雨の枕攻撃が終わり。

ラカン「いずれにせよ、よくやったぜぼーず！これでようやくスタートラインには立てたな!」

千雨の枕攻撃が止み、ネギがうなずく。

ラカン「両腕に魔力を集中してみな」

ネギ「両腕…ですか？」

ネギの腕に、闇の魔法の紋様が浮かぶ。

ネギ「これは…」

ラカン「エヴァの闇の魔法を会得した証……お前がおまえ自身で手に入れたお前だけの力だ。
誇りに思いな」

ネギ、腕の紋様を見ながらうれしそつ。

ネギM「師匠の技を会得した証……」

ラカン「けど気い抜くなよ。お前はようやく自分の得物を手に入れたに過ぎん。ここからが本番だ
ぜ」

ネギ「……ハ、ハイー!」

ラカン、湖畔に歩き出す。

ラカン「よおしつ、じゃあ早速いくぜ！見せてもらおうか」

ネギ「ハ、ハイー!」

千雨「えっおい、早速って大丈夫なのかよ!？」

慌てて2人を追う千雨に、ネギが振り返って、

ネギ「あの…千雨さん」



千雨 「ん。うん?」

ネギ 「ありがとうございます。…ホント!」

千雨 「…ぬ。いや、だから礼はいいつての…」

また千雨に背を向けて、ラカンについて歩き出すネギ。

千雨 「いや、じゃなくて。体、休めねーとマスイだろ、先生ッ」

ラカン 「大丈夫、大丈夫。2日間も寝てたんだからよ。な、ほーず?」

ネギ 「ハイ!」

千雨 「いや、それずってー違うって!」

スタスタ歩いていくネギとラカン。

その2人にツツコミを入れながら追いかけていく千雨。

※実際のアニメに収録されている音声は
シナリオと異なる場合がございます。